手のなる方へ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手のなる方へ

【Nコード】
N1902F

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
古い村。そこに集められた女の子達はまずはもてなしを受ける。だがやがて一人の少女が連れて来られて。ジャパニーズホラーです。

第一章

手のなる方へ

中田恭子のいる村は古い村である。まるで時代から取り残されたような。山の麓にありかろつじて電気や水道が通っているようなそんな場所であった。彼女はそこに住んでいた。

「今日は何して遊ぶ？」

「遊ぶっていつでもねえ」

クラスメイト達の話も遊びになると寂しいのが現実だった。村にはコンビニやカラオケといったものは全くなくとにかく娯楽がないのだ。遊ぶと言えばそれこそ外で身体を動かすか家の中でゲームをするしかない。その程度だった。

「何もないじゃない」

「まあね。じゃあ恭子の家言っている？」

「私の家？」

「うん、実はさ」

幼稚園から同じの須恵が彼女に言うのだった。この村は幼稚園から高校までずっと同じである。田舎なので必然的にそうになってしまうのである。

「新しいゲーム買ったし」

「プレステ？ウイユ？」

「ウイユよ」

にこりと笑って恭子に答える。

「恭子もウイユ持ってたわよね」

「一応はね」

あまり要領を得ない言葉で須恵に答えるのだった。

「持ってるけれど」

「じゃあ今日いいわね」

「ただ弟が今ずっとやってるのよ」

「弟！？ああ、幸次郎君ね」

「そう、あいつ」

恭子には兄と弟がいる。兄が幸一郎で弟が幸次郎だ。覚えやすいようにと祖父がつけたのである。家は代々農家であり彼女も子供の頃から畑仕事を手伝っている。

「あいつがずっとやってるのよ」

「そうなんだ」

「取り戻すのは難しいでしょうね」

少し困った顔で須恵に述べる。

「残念だけれど」

「じゃあ私の家に来ない？」

須恵は恭子の言葉を聞いて場所を変えることを提案してきた。

「それだったら」

「須恵ちゃんの家？」

「そう。それだとどうかしら」

「そうね」

少し考えてから須美に答えるのだった。

「うちの家は私の部屋にテレビあるしね」

「だったら丁度いいじゃない」

「そうね。じゃあ私の家でね」

「ええ、それでいきましょう」

「わかったわ」

一応テレビゲームの類はあった。しかし奥深い地にあるのは確か。で人々は今尚閉鎖的な環境の中で生きていた。そしてそれはただ生活だけではなかった。

恭子と須美は話通り二人で須美の家に行きそこでゲームをしていた。須美の部屋は畳であり布団敷きになっている。畳んだ布団が置かれ本棚と座布団が側にある部屋の端の机には蛍光灯が置かれ教科書やノートが整然と横に並べられている。二人はそんな部屋でそれぞれ座布団に座りテレビを前にしてゲームをしていたのである。そ

の中で恭子はふとした感じで須美に声をかけたのである。

「ねえ須美」

「何なの？」

「私達もうち中二よね」

「ええ」

ゲームの画面を見ながら恭子に答えたのだった。

「だったら。やっぱり」

「神社ね」

「神社に行かないといけないのよね」

「そうよ。ほら、村長さんが言ってたじゃない」

村で代々庄屋をしていた家だ。それが村長となったのだ。つまりここでも昔からの流れが続いているのである。何処までもそうであった。

「皆そろそろ」

「神社に集まってね」

「何をするのかしら」

「さあ」

恭子の問いに首を傾げる須美であった。

「私知らないわよ」

「私も」

それは恭子も同じであった。二人共知らないのであった。

「ただ神社に行くって聞いてるだけだね」

「他は何も知らないわよね」

「何なのかしら」

また首を傾げる二人であった。

「神社に集まって。何をするのかしらね」

「洋子さんいたじゃない」

「ええ」

二人の一学年上の先輩である。

「あの人に聞いたんだけれどね」

「何て仰つてたの？」

「何も」

恭子の返答は実に素っ気無いものであった。少なくとも二人にとつて役立つものは何もなかった。須美も今の恭子の言葉を聞いてまた首を傾げるだけであった。

「聞けなかつたわ」

「けれど洋子さんって去年神社行かれたのよね」

「ええ、そうよ」

このことははっきりと言えた。恭子にも。

「それは間違いないわ」

「けれど何で何があつたのか知られないの？」

「それがわからないのよ」

やはり首を傾げて答える恭子であった。

「覚えていないんだって」

「他の人達もそうかしら」

「洋子さんだけじゃなくてね」

恭子はコントローラーをいじっていた。しかしそのいじる様子はどうもあまり速いものではない。やっているゲームは見れば恋愛育成ゲームである。だからであろうか。

「他の人達も同じだつたわ」

「同じだつたのね」

「ええ、皆同じ」

また須美に答えるのだった。

「同じなのよ、色々な先輩に御聞きしたけれど」

「誰も覚えておられないのね」

「そうなのよ」

ぼんやりとした調子でまた須美に答えた。

「困つたことにね」

「誰も知らないなんて有り得るのかしら」

須美はそのことが不思議でならなかった。

「先輩皆よね」

「そうなのよ。誰も知らないのよ」

「おかしいわよ、それ」

須美は顔を顰めさせて言った。

「そんなことつて。誰一人として覚えていないなんて」

「おかしいわよね。けれど」

「誰も覚えていないのね」

「二つ上の人達も三つ上の人達もそうよ」

「その人達も同じなのね」

「ええ、誰一人として覚えていないのよ」

またこのことが話されるのだった。聞いている須美も話している恭子もそのことがどうしてもわからないのだった。何故誰も覚えていないのか。

第二章

「どうしてかしらね」

「おかしいことこの上ないけれど」

須美はまた言う。その不思議で仕方ないといった顔で。

「けれど私達も行くのよね」

「ええ、それはね」

もうこれも決まっていることだった。

「今度の日曜ね」

「日曜ね」

「村の中二の女の子達は皆集まるんだって」

「本当に皆なのね」

「ええ、皆」

このことがまた確認される。

「集まるのよ、神社にね」

「本当に何をするのかしら」

「少なくとも死ぬようなことじゃないのは確かよ」

先輩達は皆無事に帰って来ている。だからこれは間違いがなかった。

「痛いものでもないんじゃないの?」

「だったらいいけれど」

「それでも。やっぱりね」

「ええ、そうね」

また須美が答える。

「何があるのかしら」

「それが全然わからないから」

どうしてもそれがわからなくて不安なだった。しかし日曜日になり皆神社に集まることになった。神社は村の後ろにある山の中にあつた。そこに入るともう神社の境内に村の中学校二年の女の子達

が皆集まっていた。そして神主である村の助役もそこにいた。

「皆集まったようじゃな」

「ええ、神主さん」

「皆いますよ」

女の子達は彼を助役とは言わない。神主と呼んでいる。この呼び名で彼を呼ぶのだった。

「けれどそれでも」

「一体何をするんですか？」

「別に悪いことではないぞ」

神主は静かに女の子達に述べた。

「別にな」

「そうなんですか」

「左様、まずはじゃ」

こつ断つたうえでまた女の子達に話をしてきた。

「わしの家に入ってくれ」

「神主さんのお家にですか？」

「左様」

女の子達に答えるのだった。

「皆な。入るのじゃよ」

「何だろつ」

「さあ」

女の子達は神主の今の話を聞いて顔を見合わせて怪訝な顔で話をする。しかしそれでも何が行われるのか全くわからず首を捻るだけであつた。

「けれど変なことじゃないみたいよ」

「変なことつて？」

「だから。皆いるわよね」

「ええ」

一人の言葉に皆が頷いていた。

「これが一人だったら襲われるとかありそうだけれど」

「神主さんに限ってそれはないわよ」

「つていうか失礼よ、神主さんに」

「そうよ」

口々にこう言っただけで咎めるのだった。

「あんないい人に」

「そうそう」

神主は村では人格者で通っている。温厚で人格円満と評判になっている。面倒見がよくて親切な村長と並んで村の皆から頼りにされているのである。その彼が女の子達に対して何かするとは殆どの女の子が考えなかつたのである。だからこそ咎めたのである。

「それはないわよ」

「絶対にね」

「じゃあ何なのかしら」

それでも疑念は消えないのは確かであった。これは誰も否定できない。

「そもそも神社ってねえ」

「神社っていえば」

女の子達は自分の中にあるこの神社へのイメージを思い浮かべたのだった。

「盆踊りと」

「あとはお祭りとかね」

大体こんなところしかなかった。村の神社に対するイメージとしては非常にありきたりなもので何処もおかしなところはないと言えた。

「そんなところ？」

「新年にお参りしてね」

「それ位しかないわよね」

結論としては悪いイメージはないのだった。これは確かだ。

「じゃあ一体何かしら」

「何があるのかしら」

また口々に言い合う。だが答えは出ない。

「誰か神主さんのお家に行ったことある？」

「私だけけど」

一人の女の子が名乗り出てきた。

「一応は」

「ああ、そういえばあんた」

「うん、お婆ちゃんがね」

彼女は自分の身内についての話をはじめた。

「神主さんの妹だから」

「そうだったわよね」

「そういえばね」

つまりは彼女にとって神主は大叔父にあたるというわけだ。これはこの場においては非常に大きな意味を持ち得ることもあった。

「じゃあ聞いてるわよね」

「ここで何があるか」

「全然」

しかし彼女も首を横に振るだけであった。

「十四歳の娘が集められるって聞いてるけれど」

「じゃあ全然知らないのね」

「ええ」

また他の女の子達に答えるのであった。女の子達にとっては残念な答えであった。

「何が何だか」

「全く」

「そういえばね」

別の女の子が口を開いた。

「うちのお婆ちゃんもお母さんもここに來てるのよね」

「あつ、そういえば」

「そうなるわね」

このことにあらためて気付く女の子達だった。何故なら村の女の

子は十四歳、今の学年で言つと中学二年になるとここに集められるのだ。それで知らない筈がなかった。

第三章

「だって誰も来てるんだから」

「そうよね、確かに」

「けれどよ」

しかし疑念がここでまた出て来た。

「それで何で皆知らないの？」

「うちのお姉ちゃんも覚えてないっていうし」

「あんたのお姉ちゃんも？」

「ええ」

また一人の女の子が言うのだった。

「この前聞いたけれど覚えてないんだって」

「三年前だったわよね」

「ええ、そうよ」

つまり彼女の姉は今高校三年ということになる。少なくとも記憶力が衰える歳ではない。ましてやこうした村の行事をそう簡単に忘れるとは思えなかった。

「三年前よ」

「それで覚えていないなんて」

「三年前どころか」

話がさらに詰められていく。

「先輩達だって一年前なのに全然覚えていなかったりするし」

「ああ、聞いても誰も答えてくれないのよね」

恭子と須美がしたことと同じ結果が返って来ていたのである。皆に。

「こんなこと有り得るのかしら」

「誰も覚えていないって」

考えれば考える程奇怪なことであった。最早何が何なのかわからなかった。

「おかしいなんてものじゃないわ」

「どうなってるのよ」

口々に言い合う。しかし謎が晴れることがない。

「村じゃそれこそ何百年も続いてるんだって？」

「そうらしいわ」

この集まりの年月も彼女達は聞いてはいたのだ。

「村がはじまってからね」

「この村のはじまりって」

「それこそ」

歴史の古い村である。それこそ江戸時代、いや室町より以前からある村だ。そんな村がはじまってからというから相当に古いこともわかった。

「無茶苦茶古いなんてものじゃないわね」

「余計におかしいわね。記録にもないんですよ」

「だから誰も覚えていないから」

記録にもないというのだ。

「ただ。毎年行われるってだけで」

「それだけだからなのね」

「ちよつと待って」

また一人が気付いた。

「何かおかしいわ」

「どうかしたの？」

「記録に残っていないのよね」

「ええ、そうよ」

「それは確かにね」

「私思っただけけど」

この女の子は怪訝な顔になりつつ他の女の子達に語った。

「記録に残っていないってことは」

「何？」

「見方によっては残せないってこと？」

「こうした意見も出て来た。

「ひよつとして」

「まさか」

「そんな筈ないじゃない」

しかしこの言葉はすぐに笑って皆から否定されたのだった。

「こんな小さな村に何があるのよ」

「そうそう」

皆笑いながらその意見を否定していく。

「ただ古いだけじゃない」

「それで何を隠す必要があるのよ」

「それもそうかしら」

「そうよ」

「考え過ぎよ、考え過ぎ」

「そうよね」

言い出したその娘も笑って自分の言葉を打ち消してしまった。

「よく考えたら。そんなこと有り得ないわよね」

「当たり前でしょ。どうせお菓子か何かが出て終わりでしょ」

「だから皆覚えてないのよ」

「こういつことに話が向かっていくのだった。

「些細なことだしいつものことだから」

「お菓子っていつでもあれでしょ？」

神社ということから皆がこうした場でもらえるお菓子といえは

つしかないのであった。

「紅白饅頭」

「あれよ」

「あれね」

「あれしかないじゃない」

「こうまで言う女の子がいた。

「こうした時に貰えるお菓子って」

「神社だしね」

田舎ということや神社であるということをしり引いてもやはり考えられるのはこの紅白饅頭しかなかった。皆これが出て終わりだと考えるようになってきていた。

「それで終わりでしょ」

「お菓子食べてね」

「あとお茶ね」

お菓子にお茶は欠かせないのであった。お茶はこの村でも作られている。田舎だが栽培しているものはわりかし多いのである。だから小さくてもそれなりに豊かな村でもあるのだ。

「お茶も出て飲んで食べて」

「それで解散よ」

「そうなんだ」

どうにもこんな話で終わるのだった。

「じゃあお饅頭期待して待つからね」

「そんなところね」

「ゆっくりしてきましょう」

こう言い合って今度はそれぞれ座ったり立ったりしてお喋りに入るのだった。恭子と須美もその中にいてやはりお饅頭が貰えると思っていたのだった。

第四章

「そういえばこの村の人って皆」

「ええ、そうよね」

恭子が須美の言葉に応える。

「お饅頭好きよね」

「恭子も好きよね」

「まあね」

笑ってそれを認める恭子であった。

「少なくとも嫌いじゃないわ」

「何かっていうと出るし」

「じゃあ須美は嫌い？」

逆に須美に問い返す恭子であった。笑いながら。

「お饅頭。どうなの？」

「はつきり言って好きよ」

彼女もまた笑ってそれを認めるのであった。

「だって。甘いのが好きだし」

「そうよね。やっぱり甘いのがね」

「アイスとかケーキも好きだけれど」

流石に幾ら田舎でもこうした甘い菓子も存在している。幾ら何でもこういったものがない程辺鄙な場所ではないのである。一応は、であるが。

「やっぱり気軽さではお饅頭よね」

「そうね。そういえば紅白饅頭ってさ」

「何？」

「お祝いの品だけれどね」

恭子は紅白饅頭について話をはじめた。須美はそれを聞いている。

「何かっていうと特別に思えるのよね」

「お祝いの品だから当然じゃないの？」

「それでもよ」

首を傾げつつ須美に述べる。二人は今神社の境内のところにある石の上に二人並んで座って話をしているのだ。周りにもそれぞれ女の子達がいて話に興じている。話題はそれぞれであるが。

「お饅頭がそうじゃなくてね」

「赤と白って色がなのね」

「これがお祝いの色だっていうのはわかってるわ」

それは恭子もよくわかっていることであつた。

「けれどね。それでも」

「特別に思えるのね」

「何かとても重要なことがあつた時に」

そして言うのだった。

「節目節目で貰える感じがしてね」

「それでなのね」

「私の気のせいかしら」

またここで首を傾げるのだった。

「それとも私も考え過ぎなのかしら。どうかしら」

「まあ考え過ぎていったら考え過ぎじゃないの」

須美も少しこう考えるのだった。

「ただ単にお祝いのものだって考えれば」

「お赤飯みたいなものかしら」

「そうそう」

笑つてまた恭子に言うのであつた。

「そんなのよ。だから特に気にすることはないわ」

「そうね」

「そうよ」

笑いながらの言葉はまた続く。

「ただの御祝いだし。さてと」

「お饅頭楽しみなのね」

「粒餡かしら。こし餡かしら」

須美が気にしているのはこのことであつた。

「どっちかしらね」

「紅白饅頭だからこし餡じゃないの？」

恭子はこつ予想してきた。

「やっぱり。私はそう思うけれど」

「こし餡なのね」

「嫌なの？」

「ううん、別に」

また笑つてそうではないと答える須美であつた。

「それはないけれどね」

「だったらいいじゃない」

恭子も笑つて須美に告げた。

「それならそれでね」

「そうね。じゃあどつちが出ても」

「いいつてことでね。それでね」

「ええ」

ここで話を変える恭子であつた。須美もそれに乗る。

「明日の授業何だったっけ」

「明日の授業？」

「明日加納先生お休みじゃない」

「ああ、そうだったわね」

学校の授業の話になつてきていた。

「明日は」

「それじゃあ明日の理科の授業は誰なの？」

恭子はこつ須美に尋ねた。

「加納先生お休みなら」

「中森先生じゃないの？」

須美は首を少し捻つてから恭子に答えた。

「代打つてことでね」

「そついえば中森先生つて理科の先生だったわね」

「あれっ、知らなかったの？」

「知ってることは知ってたわよ」

このことは少しムキになって答える恭子であった。

「学年の副主任なのに。知らないわけないでしょ」

「そうよね。だからおかしいと思ったんだけど」

「ただ授業を受けたことがないだけよ」

それだけだったのだ。

「一年も二年も加納先生だったからね」

「そうだったの」

「須美は一年の理科の先生中森先生だったのね」

「ええ、そうよ」

恭子の言葉に対して答える。

「だから知ってるんだけどね」

「中森先生の授業どう？」

次に恭子が気にしたのは授業についてだった。これの良し悪しで成績も大きく変わるから当然であった。恭子の問いはそれなりに切実であった。

「ほら、西田先生の授業なんか」

「ああ、ジャマイカね」

ここで須美の顔が歪む。西田という名前を聞いてすぐに仇名を出した。随分と悪意のある仇名ではある。どうやら好かれている教師ではないらしい。

「全然わからないじゃない」

「あいつの授業はわからないので有名じゃない」

「まあね」

須美のその嫌悪感丸出しの言葉に対して頷く恭子であった。

「これ先輩達も言ってたわよ」

「そんなに有名なの」

「あいつの授業は聞くな」

須美はこうまで言う。

「そう言われていたのよ」

「確かに酷い授業だけれどね」

「まず言ってることが教科書を棒読みしているだけ」

最初からかなり酷い授業であることがわかる言葉であった。

「黒板に向かつてそれを言ってるだけじゃない、あいつの授業って」

「そうよね。本当にわからないから」

「だから。先輩から聞いたのよ」

須美は先輩の言葉を恭子に対して話すのだった。何度も。

「あいつが数学の先生になったらもう授業は聞くなって」

「聞いちや駄目なのね」

「それより自分で勉強した方がいいってね。絶対にわからないから
って」

「昔から駄目だったのね」

「そう、最悪だったらしいわ」

所謂不適格教師である。我が国の教育界の恐ろしいところはこう
した無能な教師や人格障害者の教師が全く淘汰されたり糾弾される
ことなく教壇に残り続けていることである。教育界の腐敗はこの村
においても深刻なレベルで色濃く現われているのである。

「それよりも参考書読んだりして自分で勉強する方がね」

「いいのね」

「それか塾」

須美は自分の話に塾も出した。

第五章

「そういうところで勉強した方がずっといいんだって」

「そうだったの」

「あんたもそうした方がずっといいわよ」

忠告めいた言葉であった。

「聞いたら駄目だからね」

「わかったわ。じゃあそうするわ」

「そうしたら数学の成績があがるから」

須美の言葉はかなり辛辣なものであった。しかしそれだけ無能な教師であり学生からも馬鹿にされているというのは厳然な事実である。

「わかったわね」

「わかったわ。それじゃあ」

「それじゃあ？」

「話戻るわよ」

「ええ」

話は理科に関する話に戻るのであった。恭子は須美の話の聞くだけであった。

「それで中森先生の授業だけねど」

「どうなの？」

「わかり易いわよ」

にこりと笑って恭子に告げるのだった。

「だから安心していいわよ」

「そうなの。じゃあ安心していいのね」

「ええ、大丈夫だから」

また恭子に告げる。その西田先生という教師の無能ぶりを話した後であるから余計に強調していることがわかる話であった。

「面白いしね」

「私は加納節も捨て難いけれどね」

「ふふふ、あれもね」

加納節と聞いて須美の顔が綻ぶ。

「中々面白いわよね」

「そうそう、そういうことはなきにしもあらずって言葉好きよね」

「何であんなふうに言うのかしらね」

「さあ」

笑いながら須美の問いに首を傾げてみせる。

「それはわからないけれどね。癖みたいだしね」

「癖なのね」

「だからわからないわよ」

また言う恭子であった。

「そこまではね。まあそれでよ」

「それで？」

「理科の宿題だけれど」

「ああ、あれね」

今度は須美が恭子の言葉に答えるのだった。

「あれ、もうやった？」

「一応はね」

また須美に答える。

「やったわ」

「物理つてねえ」

須美は浮かない顔で述べた。

「正直苦手なのよね」

「わかりにくいわよね」

「何なのかしら、あれ」

その浮かない顔でまた述べるのだった。

「全然わからないけれど」

「加納先生曰く全然わからないのが物理らしいけれどね」

「それ説明になってないし」

須美はすぐに突っ込みを入れる。

「わからないものをわかるようにじゃないの？」

「けれど本当にわからないから」

話が微妙に矛盾したものになっていた。

「仕方ないじゃない」

「正直ね。私も」

恭子はまた苦笑いになっていた。

「やったはいいけれど正解かどうかは」

「わからないのね」

「多分間違ってるわ」

如何にも自信なさげな言葉であった。

「それでもいい？」

「別にいいわ」

こう答える須美であった。

「見せてもらえるだけで」

「そうなの。それじゃあ」

「後で私の家に来て」

笑って恭子に告げる。

「お菓子用意しておくから」

「わかったわ」

こんな話をしていた。話をしているとここで。神主が今までめいめいお喋りに興じていた女の子達に対して声をかけたのであった。

「おおい、皆」

「あっ、呼んでるね」

「じゃあいよいよね」

「ちょっと来てくれるか」

こう女の子達に声をかけるのであった。

「今からはじめるからな」

「今からなのね」

「そうみたいね」

恭子と須美も顔を見合わせて言い合っただった。待ちかねたといった感じだった。

「それで何するのかしら」

「お饅頭出るだけじゃないの？」

話が饅頭に関することに戻った。食い意地はどうしても頭から離れない。

「それを食べて。それで」

「解散？」

「じゃないかしら」

ぼんやりとした感じで考えながら恭子に述べる須美であった。

「よくわからないけれど」

「それだけだったらお饅頭それぞれの家に配るんじゃないかしら」
須美も少しぼんやりとした感じで考えながら述べた。

「それが皆を集めて」

「だから皆集めたんじゃないの？」

また恭子が言ってきた。

「ここに」

「だからなのね」

「そうじゃないかしら」

しかしこうは言っても確信はない恭子であった。それでも物理の宿題に関するそれよりはまだ確信は深いものであるとは言えた。一応であるが。

「やっぱり」

「何か本当に何かあるのかわからないのね」

「だって誰も知らないし」

「このこともまた話される。」

「それも全然ね」

「そうよね。何なのかしら」

「ささ、それではじゃ」

しかしここでまた神主が皆に声をかけてきたのだった。恭子も須

美もそれを聞いて話を中断してその神主に顔を向けるのだった。

「中に入ってくれ」

「住職さんのお家にですよね」

「その通りじゃ」

優しい笑顔で皆に答えた。

「ちゃんとお茶とお菓子も用意してあるぞ」

「お菓子もですか」

「うむ」

その優しい笑顔で頷いてもみせる。

「用意しておるぞ。ささ、それではじゃ」

「はい」

「今行きます」

こうして女の子達は神主の言葉に従って彼の家の中に入る。当然ながらその中には恭子と須美の二人もいた。皆は玄関から入って老化を進み奥の部屋に案内された。そこは広い畳と障子の部屋だった。他には何も無いがらんとした感じの部屋であった。

「ここ？」

「そうみたいね」

「おっと、済まん」

神主は皆を部屋に案内したところで皆に言うのだった。

第六章

「お茶とお饅頭を忘れておったわ」

「忘れていたの」

「済まん済まん」

申し訳なさそうに皆に謝ってもきた。

「うっかりしておったわ」

「もう、神主さんたら」

「しっかりして下さいよ」

女の子たちは明るい調子で神主に声をかける。同じ村の顔馴染みということもあり実に打ち解けたものだ。誰もおかしいとは思っていなかった。

当然恭子と須美もだった。二人は顔を見合わせて苦笑いを浮かべたうえで話していた。

「神主さんって昔からね」

「そうよね」

恭子が須美に対して頷いていた。

「ここぞっていう時にうっかりするのよね」

「そうそう、前の村の相撲大会でも」

相撲は元々が神々に捧げる行事である。だから神道とは深い関係がある。簡単に言うとな力士は神主の親戚みたいなものだ。だからこの神主も出て来たのである。

「お祓いの前に一杯やっちゃって」

「そのせいでこけたしね」

「あれ皆笑ったわよね」

「そうそう」

恭子は須美の言葉に笑って頷くのがだった。その間に皆座布団を敷いてそこに座りだしていた。部屋のそれぞれ両端に一列ずつ縦に座布団を並べそこに並んで座っていた。恭子と須美は同じ列に並んで

座った。正座をして行儀よくしたうえで話をしているのである。

「いきなりだったしね」

「頭も打って」

「このことも話すのだった。」

「痛そうだったけれどね」

「見ている分には。悪いけれど」

二人で話す。

「笑っちゃったわよね」

「お酒飲まなかったらいいのに」

「全くよ」

こんな話をしていると神主と彼の女房がやって来た。それぞれお茶が入れられたお盆と饅頭を入れた箱を持っていた。

「待たせたのう」

「皆御免ね」

神主と女房がこう言いながら部屋の中に入って来た。皆二人よりも彼等が手に持っているものに目をやっているのだった。そのお茶と饅頭をだ。

「ささ、どんどん召し上がってくれ」

「一杯あるからね」

「お饅頭一杯って」

「何か凄くない？」

女の子達は今の話を聞いて笑顔で言い合っただった。

「来たかいがあったわね」

「神主さん太っ腹ね」

「女の子に欠かせないことじゃかな」

神主はまた笑顔になってこう述べるのだた。

「じゃからじゃよ」

「欠かせないこと？」

「まずは饅頭じゃ」

また言う神主だった。

「腹一杯食べてくれ。ささ」

「お茶もあるからね」

女房もすかさずといったタイミングで茶を出すのだった。女の子達の前に饅頭とお茶が置かれていく。余ったぶんは部屋の真ん中に箱ごと置かれる。こうして皆饅頭を食べだすのだった。

饅頭は予想通り紅白饅頭だった。その饅頭を食べながら恭子と須美はまたお喋りに興じるのだった。今度は学校に関するものではなかった。

「昨日のあのクイズ番組だけれど」

「ああ、あれね」

「見た？」

恭子が須美に問うていた。

「昨日の」

「観たわよ」

くすりと笑って答える須美であった。

「昨日も凄かったわよね」

「あの人もあんなのよね」

「学校出てるのよね、確か」

「高校まで出てるそうよ」

恭子もまた笑顔で答えていた。

「一応は」

「一応なの」

「だって。ここじゃ大体皆同じ高校じゃない」

「ええ」

田舎なのでどうしても通う高校も皆同じになってしまうのである。隣の村や町に行くのにもバスは少ないうえに相当な時間がかかるからだ。田舎故の話である。

「けれど他の所じゃ違うからね」

「だからなのね」

「そうよ。違うのよ」

また答える恭子であった。

「そういうところがね」

「じゃあやっぱりあの人が通っていた高校って」

「相当無茶苦茶な学校だったと思うわ」

「やっぱり」

須美は恭子の言葉に納得した顔になった。

「そうなるのね」

「そうならないとおかしいでしょ」

恭子はまた笑って話す。

「そうじゃないと幾ら何でも」

「昨日だってねえ」

須美は語る。

「幾ら何でも二束三文を二三十円って」

「私達でもわかったわよね」

「当たり前よ。他にもあの番組」

そうした回答が注目されている番組なのである。

「くだを巻くとネクタイって答えたり」

「それ答えた人玄人の逆新人って答えていたわよ」

これにしる彼女達でもわかることであった。中学生でもだ。

「素人よね」

「そうよ、素人」

「普通間違えるかしら」

「わざとじゃないわよね」

「違うでしょ」

また答える恭子であった。

「絶対に」

「じゃああつぱり」

「凄過ぎるわよね」

「そういう人もいるのね」

「まあそうね」

そう話をしながら饅頭を食べていく。饅頭は二人にとっても皆にとっても美味く見る見るうちに減っていった。気付けばもう一つも残っていなかった。

「美味しかったわね」

「ええ」

恭子は須美の言葉に頷いていた。見れば二人共実に満ち足りた顔になっている。

「こんなに美味しいなんて意外ね」

「あれっ、知らなかったの？」

須美は恭子の顔に目をぱちくりさせるのだった。

「神主さんの奥さんって料理上手なのよ」

「そうだったの」

「特にお菓子がね」

「上手だというのだ。」

「得意なのよ。お饅頭だつてね」

「そうだったの」

「あんたも今までにも何回か食べた筈よ」

「気付かなかったわ」

首を捻って須美に答えるのだった。

「それはね」

「ちよつとつうっかりし過ぎ」

「御免なさい」

ぺろりと舌を出して謝る恭子であった。

「けれど美味しかったわ」

「これで覚えたわね」

「ええ」

今度は普通に頷くことができた。

「美味しいものはすぐに舌が覚えてくれるから」

「また随分と便利な舌ね」

「おかげでいい思いさせてもらってるわ」

お茶を飲みながらにここにこと須美に話をしている。

「まずいものはすぐに忘れてくれるし」

「さらにいいわね」

「いいでしょ。さて」と

部屋を見回す。確認したがもう饅頭は一個も残ってはいないのであつた。

第七章

「もう全部食べたわね」

「皆よく食べたわね」

「美味しかったからね。けれどこれで終わりかしら」

「そうじゃないの?」

須美の返事はあまり深く考えたものではなかった。

「だって。お饅頭全部食べたし」

「これで終わりかしら」

「じゃあ私の家に来てね」

「ええ」

さっきの話に戻っていた。宿題の話だ。

「それでノート写させてね」

「わかったわ」

恭子は須美の言葉に頷いてみせた。

「間違っていたら御免ね」

「だからそれはいいんだって。写させてもらう立場は私なんだからそんな話をしながら解散の時を待っていた。ところが解散とはならず。神主が部屋の中に入って来て彼女達に言うのであった。

「さて、と皆いいかな」

「はい」

「何ですか?」

「お饅頭は美味しかったかのう」

まずはにこにここと笑って皆に尋ねてきた。

「それはどうじゃったかな」

「はい、滅茶苦茶美味しかったです」

「どうも有り難うございます」

女の子達は一様に笑顔で彼に答えた。

「おかげで満足させてもらいました」

「またよかったら」

「うんうん、またな」

満面の笑顔で彼女達の言葉に伝えていた。実に嬉しそうである。

「呼ぶからな。それでじゃ」

「はい」

ここで話が変わった。神主が変えてきたのである。

「皆、少しいいか」

「何ですか？」

「何かありますか？」

「うむ、実はな」

にこにこ笑ったうえでまた女の子達に述べるのであった。

「一つ遊びを用意しておるのじゃよ」

「遊び？」

「左様」

相変わらずの笑顔での返事だった。

「遊びをな。どうじゃ？」

「楽しいのよね」

「そうじゃ」

返事はそのままの調子であった。

「それも少しだけの間じゃ。どうじゃ？」

「そうよねえ」

「どうせ帰ってもね」

「そうそう」

皆顔を見合わせて言い合う。そのうえで考えるのだった。

「宿題するかゲームするだけだし」

「それだったら」

「全員参加じゃな」

「いいですか、それで」

「神主さんさえよかったら」

「よかったらというものではない」

神主は笑みをさらに深いものにさせて女の子達に答えるのだった。

「是非皆参加して欲しいのじゃよ、わしとしてはな」

「皆にですか」

「左様左様」

後ろで手を組んで楽しそうに笑っていた。

「それならばこそ価値があるからのう」

「何かしらね」

「さあ」

恭子と須美は神主のこれまでの話を聞いて顔を見合わせて話をす
るのだった。何をするのかよくわかつてはいなかった。そしてそれ
は二人だけではなかった。皆だったのだ。

また女の子の一人が。神主に尋ねてきた。

「それで神主さん」

「今度は何かのう」

「何処でやるんですか？」

まずは場所を尋ねてきた。

「場所は」

「それに何をするんですか？」

他の一人も尋ねるのであった。

「よかつたら教えてくれませんか？」

「場所は隣の部屋じゃ」

「隣の」

神主の家の奥である。そこはこの部屋と同じ程の大きさの部屋が
あるのだ。そこもまた畳の部屋でありそれもまた同じであった。

「そこですか」

「それで何するんですか？」

「皆がよく知ってるものじゃ」

今度はこう答えたのであった。

「それをするのじゃ」

「私達がよく知ってるものって」

「何かしら」

今の言葉を聞いてまた皆顔を見合わせて話をする。しかしどうにもわからないのであった。

「まあねえ。行くしかないわね」

「そうね。まずはね」

それでも誰も危ないことになるとは誰も思つてはいなかった。それは神主の人柄をよく知っているからだ。落ち着いて優しいその人柄をだ。

だから皆大人しく神主の言葉に従つて隣の部屋に入った。部屋に入るとそこには。部屋の奥に一人の少女が静かに座っていた。

「！？あの娘つて」

「何かしら」

皆まずはその娘を見て口を開いた。見れば上が白で下が赤の巫女の服を着ており髪はおかつぱであった。可愛らしい容姿だがそれは誰も知らない娘だった。

「誰かしら、あれ」

「さあ」

皆首を傾げるばかりであった。

第八章

「見たことないわよね」

「そうね」

口々に言い合つたのだった。

「この村の娘じゃないけれど」

「誰なのかしら」

「あれっ!？」

ここで恭子はふと言つたのだった。

「あの娘って」

「どうしたの？」

「いえ、やっぱり違うわね」

しかし急にその言葉を止めてしまった。彼女に問うているのは須美だった。

「知らない娘ね」

「会ったことないの？」

「ええ」

須美の問いに答える。

「見たことあるような気がしたんだけど」

「そうなの」

「気のせいだったわ、やっぱり」

これで一旦考えを止めた。とりあえず部屋の中に皆と一緒に集まる。するとここで神主がまた彼女達に声をかけてきたのであった。

「さあさあ皆」

「はい？」

「これからその遊びをやるぞ」

「遊びですか」

「そう、目隠し鬼じゃ」

聞いてみると何とということとはなかった。本当に何処にでもある」

くありふれた遊びであった。皆それを聞いてまずは拍子抜けしてしまつたのだつた。

「それをやるのじゃが」

「目隠し鬼をですか」

「どうじゃろつかのう」

女の子達の顔を覗きながら尋ねるのであつた。

「それで」

「別にいいですけど」

「私も」

「私もです」

誰も特に反対はしなかつた。これは恭子も須美も同じであつた。

二人もまた神主の話を聞いて特に反対することはなかつたのだつた。

「まあ別にいいわよね」

「ええ」

こんな感じだつた。やはり同じである。

「それじゃあいいのう」

「はい」

「それで鬼は」

「あの娘じゃ」

神主は部屋の奥に座っている巫女の服の女の子を指し示した。本当に誰も知らない、不思議な女の子であつた。

「あの娘が鬼じゃよ」

「あの娘がですか」

「駄目か？」

「別にいいよね」

「そうよね」

やはり誰も特に反対はしないのであつた。遊びに過ぎないという理由もあつた。

「別にね。鬼が誰でも」

「ええ、別にね」

「じゃあよいな」

「はい」

「それで御願います」

「それでは早速じゃが」

皆に対して述べてきた。皆この時まで誰も神主をおかしいとは思わなかった。女の子が誰か気になりそちらに注意がいていたのだ。

「目隠しをするぞ。ささ」

「はい………」

目隠しをされたのはその誰も知らない女の子だった。彼女の後ろに来て白い布で目隠しをするのであった。

「それでじゃ」

「ええ」

神主は今度は他の女の子に対して声をかけた。

「皆は捕まえられるのじゃよ」

「捕まえられる？」

「私達が？」

「そうじゃ」

女の子達の問いにその笑顔で答える。

「それがこの目隠し鬼のルールじゃ」

「逆なんだ」

それを聞いてこう思う女の子達であった。

「普通は捕まらないようにするのに」

「ここではそうするのじゃよ」

神主の言葉ではこうだった。

「これでわかったな。まずは自分から手を叩いてな」

「はい」

「手のなる方へと行って誘う」

実際に手を使って叩く仕草さえ見せる。

「それで捕まえてもらえたらいいのじゃよ」

「わかりました。それじゃあ」

「やらせてもらいます」

「ねえ須美」

ここで恭子が須美に声をかけた。

「何？」

「それが遊びなのね。神主さんが仰ってた」

「そうみたいね」

須美は恭子のその言葉に頷く。

「どうやら」

「何かって思ったら随分変な遊びだけれど」

「変って言えば変ね」

これは恭子も頷くのだった。

「まさかこんなことするなんてね」

「思いも寄らなかつたけれど。まあ」

「やりましょう」

「何か面白そうだし」

須美もまた言ってきた。

「うきうきした感じになってきたわ」

「そうね」

こんな感じで遊びに入る。女の子達は早速それぞれ手を叩いて誘うのであった。

「鬼さん鬼さん」

「手のなる方へ」

恭子もその中にいた。楽しげに笑いながら女の子を誘う。

「鬼さん鬼さん」

誘うその顔は笑っていた。

「手のなる方へ」

こう言っただけで声をかけているその近くに目隠しをして歩いている女の子がいる。周囲に顔を向けることなく耳だけを頼りにしているようだった。その時々でくるりくるりと方向を変える。しかし目が見えないうえに声も一つではないのでどうしても誰かを捕まえること

ができない。そうして暫く時間が経った。

やがて女の子は恭子の前に来た。彼女はそれを見て「こそとばかりに声をかけた。

「鬼さん鬼さん」

これまで以上に手を叩いて。

「手のなる方へ」

こう誘うと女の子は恭子の方に近寄ってきた。そうして彼女の前に来て遂には。恭子を捕まえてしまったのであった。

「捕まったあ」

恭子は捕まった瞬間に実に楽しそうに声をあげた。

「まさかここで捕まっちゃうなんて」

「ほほほ、よかったのう」

神主は彼女が捕まったのを見て楽しそうに言ってきた。

第九章

「おめでとう」

「捕まりましたけれど」

「うむ」

恭子に対しても答える。

「これで遊びは」

「終わりじゃよ」

優しい声で彼女に語った。

「これでな。さて、皆は解散じゃよ」

「これで終わりですか」

「ところが恭子ちゃんじゃ」

「私は？」

「少し残ってくれ」

こう彼女に述べるのであった。

「それでよいかのう」

「ええ、まあ」

何が何なのかわからないまま神主の言葉に頷く。

「それでしたら」

「少して済むからのう」

「そうなんだって」

須美にもこのことを伝える。

「だからね須美、悪いけれど」

「わかったわ」

須美も納得した顔で恭子の言葉に頷いた。

「村の行事だし仕方ないわね」

「ええ、だから」

「待ってるからね」

笑顔で恭子に言っただけから別れを告げるのだった。

「またね、恭子」

「後だね」

二人は笑顔で手を振り合って別れる。今はこれで終わりだった。しかし神社の玄関を出たところで須美は、ふと変わった名前を口にするのだった。

「春日も羨ましいわね」

「そうよね」

「またお饅頭じゃないかしら」

周りの女の子達も彼女の言葉に頷く。その春日という名前にも。

「もっと食べられるなんてねえ」

「運がいいわ」

「もう少しだったのに」

中にはかなり残念そうな娘もいる。靴を履いて神社を出たところでそれぞれ言っている。

「それがね。春日のところに行って」

「まあまあ」

そんな彼女を周りの女の子達が慰める。

「次があるわよ」

「そうそう」

こう言って慰めるのであった。

「だからそんなに嘆かないでね」

「忘れて忘れて」

「別に忘れてもいいか」

その女の子もその言葉で落ち着いて納得した顔になるのだった。そのうえでまた言う。

「じゃあお家に帰ったら」

「どうするの？」

「今度は羊羹を食べるわ」

気を取り直してこう言うのであった。

「それ食べてね。満足するわ」

「どつちにしろ食べるの」

「お饅頭が駄目なら羊羹よ」

何故かそういう理屈が彼女の頭の中で完成してしまっているようである。どういふ事情なのかは理解不能なものであるが。

「だから。お家に帰ってね」

「それはいいけれど太らないようにね」

「食べ過ぎたら彼に嫌われるわよ」

「それはわかつてるわよ」

少し慚然とした顔になって言葉を返す。

「そんなことは」

「だったらいいけれどね」

「まあ今は早く家に帰ってね」

「そうね。さて、と」

須美は神社の階段に足を入れたとことでまた言った。

「春日が来る用意。しておきましょう」

彼女は自分で気付いていなかった。自分が言っている名前が違ふことに。そして誰もこのことには全く気付いてはいなかったのだ。た。

そしてその頃恭子は。何故か神主の家から神社の境内に案内されていた。服も着替えさせられ先程の鬼の娘と同じ巫女の服を着ていたのである。

「あの神主さん」

その暗い境内の中で彼女は神主に声をかけていた。

「何じゃ？」

「今から何をするんですか？」

怪訝な声で彼に尋ねていた。彼女は神社の中で立っていてその側に神主が寄り添っていたのである。二人並んでそこにいたのであった。

「この境内でするんですね」

「ああ、そうじゃが」

「それは一体何でしょうか」

「すぐにわかる」

彼はこう答えるだけであった。

「すぐにな。さて」

ここで。扉が開いたのだった。そして入って来たのは。

「やあ神主さん」

村の村長だった。にこやかに笑って神社の中に入って来たのであった。

「もうそちらの準備はできておるようですね」

「はい、そうです」

またにこやかに答える神主であった。

「今年も無事できました」

「そうですね、今年もこれで大丈夫です」

「！？今年も」

今の言葉を聞いて怪訝な顔になる恭子だった。

「今年もって。何が一体」

「ああ、こちらの話じゃよ」

村長もまたにこにここと笑って彼女に答えるのだった。

「こちらのな。だからな」

「気にすることはないんですか？」

「その通り。ささっ」

ここでもう一人村長に案内されて部屋に入って来た。その部屋に入って来たのは。

あの少女だった。鬼をしたあの少女だ。今度は目隠しをせず表情がない臃な様子で部屋に入って来たのだった。目だけが恭子を見ている。黒い大きな目で。

第十章

「この一年御苦労じゃったな」

「春日ちゃん、お疲れじゃったな」

「春日ちゃん」

恭子はその名前を聞いて、ふと何かを思い出した。それは。

「鈴沖先輩ですか？」

彼女の一つ上の先輩である。今何故か急に思い出したのである。

「確か鈴沖春日先輩」

「ああ、そうじゃよ」

「その娘じゃ」

村長と神主も答えたのだった。そうであると。

「思い出したようじゃの」

「いつも通りな」

「いつも通りって」

「さあ春日ちゃん」

村長は恭子の問いには答えずにその春日という少女に声をかけるのだった。その両肩を抱いて優しく声をかける。

「最後の仕事はな。最初と同じじゃよ」

「最初と同じ」

「そう」

「こう春日に囁く。

「そうじゃよ。だからさあ」

「では村長さん」

神主も恭子から離れた。そうして村長の横に来て彼に声をかけた。春日は日の光を背に受けて長い影を見せていた。逆行の中で黒い大きな目だけが恭子を見ている。

「わし等はこれでな」

「うむ。毎年通りな」

こう言い合い神社から消える。扉をそつと閉めるとそれで光がなくなつた。暗くなつた部屋で恭子とその春日という少女だけになつたのだつた。

場を緊張が包み込む。少なくとも恭子の周りは。恭子はその重苦しい緊張の空気に耐えられず春日に声をかけるのだった。

「あの、先輩」

怯えが入つた顔で彼女に問う。

「これから何を」

「……………」

だが春日は答えない。ただじつと恭子を見ているだけだ。やはり一言も語らずやがて一步前に出て来た。そうしてそのまま足を進め恭子の側に来たのだった。

「一体、これから」

「入れ替わりよ」

恭子の耳元でそつと囁いてきた。それは恭子もよく知つてる春日の声の間違ひなかつた。だが何故かこのことを今まで忘れてしまつていたのだ。

「これから入れ替わるのよ」

「入れ替わりつて」

「一年。一人が巫女を務めるのよ」

「一年……………」

「知らないわね。それも当然ね」

春日は微かに笑つて恭子の耳元で囁き続ける。その囁きは何処か隠微で誘つものすらあつた。恭子を何か違つた世界の中に。

「だって。このことは誰も覚えられないし」

「覚えられない」

「覚えているのは私だけ」

微笑みと共に囁きが続けられていく。

「私だけなのよ。これはね」

「私だけ……………」

「そして次は貴女」

今度の囁きの言葉であった。

「貴女が。私の次なのよ」

「巫女になるんですか」

「そう。あの目隠し鬼で捕まった娘がなるのよ」

そういうことであつたのだつた。何故あの時目隠し鬼が行われたのか。全てはそれが理由なのだつた。今はじめてわかつたことであつた。

「一年の間ね」

「一年……」

「さあ、代わりましょう」

この言葉と共に恭子を床にそつと寝かせてきた。そのうえで彼女の上に覆い被さる。

「貴女と私が。これで」

「これで……」

「痛くはないわ」

微笑みに含まれていた隠微さがさらに深くなる。それと共に春日の顔が恭子の顔に近付き。後は部屋の中に布が擦れ合う音と小さいが激しい息遣いがあるだけだつた。

この時村長と神主は神社の外の階段のところにいる。階段のところに二人並んで座つて話をしていた。

「今年の巫女は恭子ちゃんじゃつたとはのう」

「意外じゃな」

村長は神主の言葉に応えていた。

「まさかあの娘だつたとは」

「うむ。しかしですじゃ」

「ここで神主は言つ。」

「これでまた一年。村は」

「安泰じゃな」

「そういうことですじゃ。山の神様に仕える巫女」

不意にこの言葉が出た。

「それを一人出して神様の御力を得る」

「村にとっては必要なことじゃ」

「そうですね。それにです」

「うむ」

「一年です」

神主は言った。

「一年務めてもらうだけですから」

「その一年が終わればどうということはない」

村長も静かに語る。しかし後ろを振り向くことは決してなかった。

「何もかも忘れて元の生活に戻られるのじゃ」

「そういうことですな。しかも本人も自分も覚えてはいない」

「善き哉善き哉」

「それでどうです？」

神主は村長に顔を向けて尋ねてきた。

「これから」

「一杯か」

「ええ、そうですね」

右手で杯をあおる仕草をしてみせて彼に問うていた。

「村越さんからお誘いがありましたね。それで」

「そうじゃな。それでは」

「牡丹鍋だそうですね」

所謂猪鍋だ。豚に似た味なのは当然であるがその豚よりも匂いが

しておりしかも肉も固い。癖のある食べ物だと言っていい。

「どうでしょう、それで」

「では呼ばれようか」

「はい、それでは」

二人は笑顔で頷き合い立ち上がった。その後ろから春日が一人出て来る。開けられた神社の中は暗がりでも見えはしない。しかしそこに山の方から現われた美しい、しかし明らかに異形の女が入っ

て行くのが見えた。だが二人はそれを決してみようとはしなかった。まるでそれが決して見えないものであることを知っているかのように。振り向かず笑顔を作って二人並んでその場を後にするのであった。

手のなる方へ 完

2008・9・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1902f/>

手のなる方へ

2010年10月8日15時29分発行